

# 伝えたい、伝統芸能の心

高森町伝統芸能連絡協議会会長 本田 研一

高森城の落城は、天正14（1586）年正月23日だそうです。

高森城主・高森伊予守惟直と、三森兵庫守能因は、清栄山麓「高森殿の杉」として近年多くの人達が訪れるようになったこの地で、薩州島津との闘いから逃れ、再興を願い豊後の国へ向かう途、薩州島津の兵に出会い、闘いから自らの命を絶ちます。その後43年を経て、武田儀兵衛元朝によって、現在地含蔵寺に移し、五輪の供養塔を建立したといえます。

遠い本場に遠い、青森県。

本州の最北端に位置する青森との交流を考えると、今でこそ飛行機として新幹線とそれは容易になったようですが、九州人にとっては、今は東南アジアに行く距離に匹敵します。

それは、高森家の末裔だとされ、青森市在住の故高森清吉氏です。

りんごを栽培されているそうです。本町にもお見えになり、含蔵寺に、当時数百万円はしたであろう鐘

楼の寄進がありました。

高森より青森まで、どのような経路を辿ったのでしょうか。

豊後の国へ向かい、そこから舟にてどちらへ向かわれたのでしょうか。青森は目的の場所だったのでしょうか。何年かかり、たどり着いたのでしょうか。

その方はお亡くなりました。住職が青森まで行かれたそうです。

含蔵寺は、高森城主の菩提寺でありました。

鎌倉時代の創建と伝えられ、天台宗で代々高森城主の香花院でありました。

天正14（1586）年、薩州島津軍との戦いで落城し、当山も兵火のため燃失しました。その後文溪大和尚が禅刹に改め、寛文元（1661）年に熊本の禅定寺の納川明海和尚が再興し、起雲山含蔵禅寺と称するようになりました。

含蔵寺は、1万坪の敷地を有するそうです。



▲含蔵寺（高森・上在）

があり、錆びているものの、往時を偲ぶにはあまりあるものです。

弥生時代を最後とした、幅・津留遺跡の先人達。

それらは古墳時代になると拡大し、含蔵寺から山手にかけて別所の堤に至る位置を住まいとしたと思われます。

境内をめぐり、高森家、武田家、三森家の石塔に一礼をして散策すると、含蔵寺六地藏があり、そして層塔に出会います。いつしか声を掛け目を閉じると、数百年を過ぎた世界に出くわします。

高森城落城後の、高森家の人達の動向が気がかりでありました。

青森市在住の方から、そして「巨人の星」の著者梶原一騎氏と、数名人達がいます。

あまりにも交流がなく忘れられたかの、八代城主・松井家との関係。私の叔父、医者であった「本田逸茂」は、医学校を卒業後松井家にて開業まで勤めます。それは明治期ですが、高森城の誰かが落ち延び、そして高森の人達との交流が続いていました。

門前の前を左折すると、すぐに梅林弓道場が見えて来ます。郡民体育祭での優勝経験もあり、代表として県民体育祭にも参加され、上位の成績を残しています。

そこを過ぎると、大きな駐車場があります。かつては梅林だったそうです。

正面より門を過ぎると、三つの家紋を有する本殿が、悠然として現れます。

内部には、書が描かれた屏風が立ち並び、右手に昭和23年に高森中央小学校前方左手より発掘された剣等